

徹夜明けにエボルトになっていたのですが。

通りすがりのゴキブリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何か徹夜明けに寝たらエボルトになつてました、地球に舞い降りたは良いですが、何か色々元居た地球と違うみたいです。

### ※注意

- ・この小説は作者の妄想を書き殴ったものです。
- ・作者の文章力は「諦めたら?」のレベルです。
- ・恋愛要素ありなので、原作カツプリング以外認められないお方はブラウザバック推奨です
- ・感想や評価を頂くと作者は狂喜します。
- ・作者は小学六年生のメンタルのまま成長した可哀そうな人間です。(豆腐メンタルです。)
- 以上の事をご理解の上、身構えてご覧ください。

目  
次

プロローグ	1話	うつかりエボルト	1
	2話	おかえりエボルト	5
	3話	まぜてよエボルト	9
	4話	あそんでエボルト	14
	5話	おとまりエボルト	18
	6話	がつこうエボルト	24
			30

## プロローグ

「…はあ～、レポートやつと終わつたよー。」

椅子の背もたれに勢い良くもたれ掛かる。

徹夜明けの日曜日、時刻は13時。世間で言う昼時はもう過ぎ、人々は大方昼寝をしている時間帯だろうか。

「ふあ～」

口から大きな欠伸が出る。昨日から寝ていないから滅茶苦茶寝みい。

ベッドに入り脱力して目を閉じる。

「きょうがおまえたちのめいにちだ！」

「こんどこそおわりだ！えぼるとおおおお!!」

…少し外が騒がしい。

何やら子供の遊び声の様だ。

眠りを邪魔された事で苛つきを少し覚えるが、同時に微笑ましさを感じる。

先程聞こえた声は「エボルト」と聞こえた。

大方仮面ライダービルドのごっこ遊びでもやつてるんだろう。最近の子供は凄い、あんな複雑なストーリーを理解できるのだから。仮面ライダー…懐かしいな…

俺は幼い頃から自他共に認める大の特撮好きだ。幼少の頃はよくごっこ遊びもしたつけ…

…しかしエボルトか…

「あー、一度ストレス発散がてらにエボルトにでもなつて惑星ぶち壊しまくりて～!!叶えて神様。」

…一人で何を言つてるんだ俺は…

エボルトになつて惑星ぶち壊したいつて…小学生でも言わないぞ

思わず口に出してしまつた言葉に恥を覚える。

「…はあ～アホらし、寝よ。」

再び目を閉じ、体をリラックスさせる。

『お主の願い叶えてやろう。』

なんか聞こえた？…気のせいいか！

\* \* \*

目が覚めるとまず最初に覚えたのは体がふわふわする感覺、浮遊感と言うべきか。

そして目に写つたのは真っ暗な空間に白色の大地、しかしその大地を踏みしめると非常にごつごつしており、まるで岩の上を歩いてる気分だ。

そしてここが何処なのか、それは目の前にある光景を見ればすぐに明らかになった。

「…………?!」

俺の目の前にあるのは大きく、そして青く美しい惑星。  
本来俺が居るべき惑星。

間違いなく地球だ。

ここから地球の全体を見ることが出来ると言う事はここは宇宙空間であると言う事。

そしてこの光景に白い大地、何より今見える地球、この光景小さい頃宇宙の図鑑の写真で見たことが有る。

「…………」月面か？

……!

なんだ今のは？俺が出した声か？何か妙に聞き慣れた声だつたが

……!

「あー、あーアメンボ赤いなあいうえお」

間違い無い俺が出した声の様だ…

「何故声が変わってる?」

変わり果てた声で疑問を呟く。

そもそも何故今月面にいる?

これは何かの夢か?

夢ならば早く覚めたい、そう思いながら両頬をつねつたりパンパンと軽く叩いて見るが顔が手に触れる度、突起物に触れたような感覚を覚える。

そして先程から感じるこの包まれているような感覚:何やら今俺は何かを纏っているみたいだ。

「…夢ではない…」

しかし一つこれではつきりした、感覚を正確に感じ取れると言う事はこれは現実だ。

しかし現実となると俺の体に起こった異変をそのままにする事は出来ない。

「どうなってるんだ?!」

半ばパニックになりながら自分の体を見てみる。

やはり俺の姿は変わっている様だ、しかしそれを見た瞬間自分が何者に変わったのかを完全に理解してしまった。

「…まさか…」

嫌な予感で心を一杯にしつつ何度も全身を確認する。

黒がメインのアンダースーツに白黒のアーマー、そして腰に巻かれた黒色のトリガーが装置された赤色のバツクルに二つのボトル。

「…仮面ライダーエボル…だと?!」

間違い無い、徹夜明けに目が覚めたら俺は仮面ライダーエボル ブラックホールフォームへと姿を変えていた。

「何で…何でこんな事になつとるん?!」

はつと自分の失言を思い出す。

『あー、一度ストレス発散がてらにエボルトにでもなつて惑星ぶち壊しまくりて〜!!叶えて神様』

オイ嘘だろ。

あの時はマジで願つてはいないんだよ。  
何でマジになつて叶えちゃうの？

大学2年生、石動総一。課題や勉強に追わされて多忙な日々でもそれなりにやりがいは感じていましたし、別に不満も無いのです。

……ただ……ただちよつとだけ。

男の子なら誰にでもある闘いに憧れる感情が少し他の二三の児童の果頃三十一歳の三話こ抱き二二、この三三。

……本当ですよ？

# 1話 うつかりエボルト

俺がエボルトになつてから数分後、俺は今月面をてくてくと歩きながら考え方をしている。かの有名な哲学者のアリストテレスは散歩をしながら考え方をしていたと言うし、何か良い考えは有るかと脳ミソを回転させていたのだ。

まあ俺がじつとしている事ができない人間と言うのも有るが。確かに俺はエボルトになつた、しかしそれは声と姿だけでもしかしたらパワーの方は飛んだパチモンなのかも知れない。

まずは自分自身のパワーが本物か、そして何れ程なのか知つておく必要がある。

しかしこのまま月面に居ると言うのもアレだ。

取り敢えず、ある程度自分自身の実力が解つたら地球に帰ろう。地球に帰つたら何をしようか：エボルトだからな擬態能力で人間に変身できるだろうし、取り敢えず人間として元の生き方に戻るべきか或いは心機一転して地球に拠点を設けてストレス解消がてら色んな惑星を滅ぼすか。

正直人間としての石動総一の人生にはそれなりに愛着は有る、だが別に地球外生命体として生きてみるのも悪くない。

うーん、この際良い奴だけ他の惑星に上手い事逃がして地球滅ぼすのもアリかな？

ぶつちやけ俺はあまり人間に對して良い想い出がない。

友達も少なかつたし、居たとしてもあまり付き合いは長続きしなかつた。両親も俺が一人暮らしを初めて以降音信不通で気に掛けもしない。まあ俺は俗に言うぼつちつて奴だ、エボルトになつた以上人間としての自分に未練はない。

エボルトとして生きるか、人間として生きるか：今後の方針は帰つたらゆつくりと考えよう。

何はともあれ今は自分自身の実力が本物か調べなくてはいけない。どれ試しにアイテムを確認してみようか：

すると両手にパツとランスチームガンとスチームブレードが現れる、成る程こう言つた武器は俺の意思に呼応して召喚されるのか。そして俺の意識に呼応して消える。自由に出し入れ可能らしい。だがこんな能力エボルト持つていたつけ？

「でもまあ、こりや便利だ。」

スチームブレードを軽く振り回しながら、金尾ボイスで咳くと同時にある事に気付く。

「…そろいえばパンドラボックスは有るのか？」

両手に念を込めてみると6面のパンドラパネルが装着され、60本のフルボトルが装着されたパンドラボックスが現れる。

「…」りやたまげた

まさかパンドラボックスまで現れてしまふとは…しかもフルボトルが装着された状態と来た。

ぶつちやけパンドラタワー作る気無いんだけどね、星をぶち壊すときにしか使わないだろうし…

「お次はこれか」

パンドラボックスを消して黒と白のパンドラパネルを出現させる。

お、ちゃんとロストフルボトル装着されるな。

黒いパネルは怪人態になるのに必要だから召喚出来ると思つていたが、まさか白いパネルも呼び出せるとは思わなかつた。

だが黒は怪人態になる時に使うとして、白は別に使う機会は無いな  
：別に平行世界に行つてもリスクしかないし、別に新世界作る気無い  
し。

：取り敢えずこの二つは仕舞つておこう。

これでアイテムの確認はできたな…どうやら全て本物の様だ。

次は戦闘能力の確認だ、エボル ブラックホールフォームは歴代ライダーの中でもトップクラスのスペックだ、しかもそれは初期状態のスペックに過ぎず、ハザードレベルが上昇すれば更に上昇する。

そしてエボルの恐ろしい所の一つで自身の戦闘力を50倍にできるというデータラメじみたブーストが可能と言う事だ。

更に皆さんご存じブラックホールを生成できるというチート機能、その気になればトイレ感覚で惑星を破壊できる。

エボルトの馬鹿げた力はそれだけではない、今の状態である、ブラックホールフォームもあくまで成長途上に過ぎずこの先に怪人態、そして究極態と言う別の次元が存在するのだ。まあ、余程の事が無い限り怪人態や究極態にはならないと思うが。

先程のアイテム確認で武器等は全て本物である事が解った。次は本格的な戦闘能力を確かめたい。

そんな事を思つていたら丁度良い、小さな隕石が地球目掛けて飛んでいる。たしか隕石って年間に500個程落ちるらしい。多いんだか少ないのだと解らないが、隕石を生で見るのは結構レアだ。

「よし、アレで試してみるか。」

エボルドライバーのハンドルを回し、ベートーベンの交響曲第九番の様な音声が鳴る。

『Ready go! ブラックホールファイニッシュ！チャオ！』

あまり大きすぎると月もろとも巻き込んでしまう、かと言つて小さすぎると隕石に届かない可能性もある。

慎重に掌でブラックホールを作り出し大きさを調節する。

「えーっと…これくらいかな？」

\*\*\*

一方数分後の地球、日本では

いつもなら様々な話題が飛び交い笑い声や泣き声が響くはずだが、今日は皆動搖を隠せなかつた。

都内のビルに設置された大型テレビジョンの前に出来た人混みの中には「世界の終わりだ」とか「地球滅亡」だの言う者もいれば、念佛を唱える者もいる。

ここまで多くの人間が取り乱す理由は言うまでも無い。

先程からテレビの中のアナウンサーが焦り氣味に伝えてている出来事だ。

『繰り返します、本日未明ブラックホールの様な物が月を吸い込み、月は7割がた消失したとの事です。月を飲み込んだブラックホールについては解析不能で、月の大半を消失させた後すぐに消えたとの事です。果たして私たちはもう永遠に満月を見る事ができないのでしょうか？』

多くの人間はこの事を信じられなかつた、だが日が沈み上を見上げると今日日本來見えるはずの満月が綺麗な三日月になつていて以上信じるしかなかつた。

数時間後月の七割もの体積が減つたため、地球の公転スピードが狂い、気温が急上昇と急降下を繰り返す日々が数日続いた。

さらに月の殆どが破壊され月の干潮が弱くなり、多くの都市が水没、日本も九州、四国、北海道に大洪水が起きた。

正にパニックだ。人々は錯乱し地球は大混乱に陥つた。

多くの人々は思つた、これは神の天罰で人類は滅ぶのかと。

例え水没や災害の危険がない安全な場所に住んでいる者も死を覚悟する程であつた。

だがそれは杞憂に終わつた。

なんと数日後、三割しか残つていない月が再び引力で地球を支え始め、地球の公転のスピードも干潮もほぼ元通りになつたのだ。

しかし人間たちは知らなかつた。

「やばいやばい！月の殆どが無くなつちまつたじやねえか?!こりや酷いことになつた…どうしよ…」

今回の事件の元凶がすぐそこまで迫つてゐる事に。

## 2話 おかえりエボルト

オツス！オラエボルト！

皆さんもう知っているかと思うが、数週間前俺は派手にやらかした。

エボルトの力を試そうと思い、小さめのブラックホールを生み出したらどうやらブラックホールのパワーが強すぎたらしく月の七割を消滅させてしまった。

これじゃ何処かのタコ型超生物だ。

誠に申し訳ございません、狼男の皆さん。貴方達はもう変身できません。

まあそんなこんなで、月の殆どが消滅したら地球の公転スピードだの干潮だの偉い事になつていてるだろうし、ある程度ほどぼりが覚めるまで暇なので、太陽系近くの惑星を片つ端から滅ぼしていたのだ。：数日で三日月の状態で衛星の役割を担える程月の力が復活するとは思わなかつたが。

まさか隕石一つを破壊するつもりが、まさか月の七割を消し飛ばしてしまうとは…やはりブラックホールは恐ろしい。：あの時地球は偉いことになつていただろう。

しかしやらかしてしまった以上仕方ない。

ここはポジティブに考え、次自分がやるべき事をやろう。  
さて、俺が次にやるべき事…それは勿論地球に帰る事だ。

俺がやらかしてからかれこれ一週間、月の引力も戻つた事だし、まだ被害を被つた所は大変だろうけど、ある程度はほとぼりは覚めているはずだ。

帰還するなら速い方が良い、行くなら今が丁度良いだろう。

「…行つてみるか。」

天体移動の為に装備されている腰のロープ『EVOベクターロープ』を使い、推進力を全開にして地球目掛けて突っ込む。

凄まじい速度だ。慣れていないからか少しあつかないが、これなら

数分足らずで地球に到着できそうだ。

「……そろそろ大気圏か！」

いかなる天体でも装着者が安全に破壊活動が出来るエボルトのステッツ『EVOオムニバースステッツ』の機能により、全身に遮断フィールドを開く、これならば大気圏突入の際の空気摩擦を無効にできるだろう。

「目的地は…日本にするか！」

そしてフィールドを開く、目的地を日本に設定した瞬間、移動スピードが更に速くなる。嫌、落下していると言うべきか。理由は言うまでもない地球の重力だ。

俺は重力を『EVOベクターロープ』で操作し、不時着しないように自分の落下する体を日本目掛けて一直線に運ぶ。

「降り立つ場所は…取り敢えず関東付近にしておくか。」

そして一分も満たない内に大気圏を突破し、霧のような雲を潛り抜けると遂に待ちわびていた光景が目に写る。

「うん、やつぱりこれだね。」

大量の商店街や建物、そして多くの人々。

俺が今居る高度は何メートルかは知らないが、こうして高い所から見る町並みは良いものだ、多くの物を見下ろした事で自分が一番偉い人間になつた気分になれる。

「…人間つてミジンコみたいなんだな…」

ぼそつと言葉が漏れる、ここから見るとどんなに身長が大きい人間でもどんなに偉い人間でも小さく見える。そして何よりも今の俺はエボルトだ、どんなに強い人間でも一瞬で潰す事ができるのだ。

これが地球外生命体の視点…エボルトやキルバスはこう言う感覚で地球を見ていたのか何となく理解できた。

おつと感傷に浸るのも良いが取り敢えず地上に降りなくては。  
俺は重力を操作し、ゆっくりと地上へと降り立つのであった。

\*\*\*

時刻は16時頃、裏路地にて俺は静かに着地し両足がしっかりとコンクリートを踏みしめる。

数週間も月面で過ごすのを余儀なくされていた俺に故郷の大地の感触は反則だつた。

「遂に…遂に戻ってきたあああああ!!!」

故郷へ帰還出来た歓喜を腹の底から目一杯叫ぶ。

本当は商店街や建物を観た時から叫びたかったが、今ここなら人も居ないし、心置きなく叫べる！

さてやつと地球に帰れたんだ、変身を解いて町をぶらつこうか。いや、それはもう少しの辛抱だ、今はやらなくてはいけない最終確認が有る。

念のためにエボルの視覚センサー『EVOツインアイホワイト』の機能使い、辺り一面をスキャンし空気中の物質を検知・解析する。問題ないと思うが呼吸できないなんて事や空气中に有害物質があるとなると大惨事だ。

「解つていたが、大丈夫みたいだな。」

特に大きなトラブルとかもなく、何事もなく地球に来る事が出来た様だ。

地球上で体の動きに変化は無いかを確認するために、肩の力を抜いて軽くその場でストレッチをする。やはり重力が有るため宇宙空間よりも動きやすい。  
だが最終確認を終え、変身を解除し、久々の地球の空気を胸一杯に吸い込もうとした瞬間だった。

内部モニターに大量の文字が表示される。何やらエボルの側頭部に有る角『EVOワイプアウトブレード』の機能によるものらしい。どうやらこれは降り立った惑星の座標や天体などを解析しそれを基

に一番滅ぼすのに効率的なプランを提案するという物騒な機能なのだが、俺は地球を滅ぼす予定はない。今のところはな。

宇宙で「地球を滅ぼすのもアリ」と考えたのは一種の気の迷いだ。まあ滅ぼしても構わないが生まれ育った星なんだそれなりに愛着はある……と思う。

……だが地球を滅ぼすプランか……興味が有るな……ぶつちやけ適当に暴れていても今の俺ならば地球なんて簡単に壊せる、しかし機械により地球を解析し、提案されたプランとなると興味をそそられない方がおかしかった。

「……えーっと……」

提案されたプランであろう内部モニターに書かれている文字を読み上げる。

どうやら手順良く進められるように箇条書きに書かれているようだ。

1. プリキュアを殺害する。
2. ドツクゾーンを壊滅させる。

……え?

思わず読むのを中断してしまう。

プリキュア? ドツクゾーン?

……プリキュアだと?

……いやプリキュアの存在は一応知っている、なんせ国民的に有名な女児向けアニメだからな。

しかし何故にそれがこのプランに出てくる?

そしてドツクゾーンって何だ?

壊滅つて事は組織の様だが……フリー・メイソンとかの秘密結社的な物か?

「…まさか…」

スースの中で目を見開く、これはまさか…！

異世界転移つて奴か!?

二次創作の小説の設定の様で、信じがたい話だがそれしか考えられない。俺は徹夜明けに気が付いたらエボルトになつて、プリキュアが存在する世界に転移した。

「…プリキュアか…」

そう呟きながらドライバーに装置されている二本のボトルを外すとスースが粒子状の光となり霧散し、俺は元の人間としての姿へと戻る。

取り敢えずここにいても何もならない、この世界の見物がてらその辺をうろついて見よう。

「…この世界がどんなものか、楽しませてもらおうか。」

俺はゆっくりと降り立つた別の地球を歩み始めるのであつた。

### 3話　まぜてよエボルト

俺が地球に舞い降りて数分後。

俺はこの町の構造や建物を知るためにあてもなくその辺を徘徊していた。

「…さて、この先どうすべきか。」

取り敢えず地球に来てみたが、この先の事を考えていかつたため、頭を抱える。

俺が異世界転移したと言うことならば、ここは俺の住んでいた世界ではない。つまり家がないのだ。

そして家も無ければ金もない。

この地球で生きていくには金が必要不可欠と言つても過言ではない。

エボルトの力を使つて強盗とかするしか無いのか？…いや流石に罪の無い一般人にこの力を使う事は出来ない。

…どうやら暫くの間は野宿するしか無いようだ。

働くとしたらバイト…何をしようかな…

別で買いに来たは良いものの根本的に重大なことを考えていなかつた：

やれプリキュア以前の問題だ。

「これじゃあ楽しむ所では無さそうだな…」

トホホと一人愚痴ながら公園のベンチに腰かける。

だがその時だつた、自分の周囲に咲いている花が急に枯れ始めたのだ。

それだけではない空気は淀んで息苦しく、日没まだ時間が有る筈なのに空は真つ暗だ。まるでこの公園の通りだけ別の世界に変わつたかの様に生気が無い。

「どうなつているんだ？」

すると妙に大きな叫び声の様な声が耳にはいる、いきなりは止めてくれ、流石にビクツとしたぞ：

「ザアアアアアケンナアアアアア！」

ざけんな？

近くで喧嘩だらうか？俺には関係の無い事ではあるが、流石にこれ程の大声となると近くの人間にも迷惑だ。一言物申さねば。  
そう思いながら声のした方角へ足を進めていると。

「闇の力のしもべたちよ！」

「とつととお家に帰りなさい！」

今度は女性の大声が聞こえた、それぞれ声が違うため二人いるのだろう。しかし闇の力のしもべ？何か中一臭いな…さつきの喧嘩に巻き込まれていなければ良いんだが…

「ザアアアアケンナアアアアア！」

W o w：少し歩いてみたら何か黒い影のバケモノと、先程叫んでいたであろう黒と白のカラーリングした二人組の少女が居ました。

バレないようすぐさま木の陰に身を隠す。

バケモノ？あれがドツクゾーンって奴か？

「行くよ！ホワイト！」

「うん！」

木の陰から女の子二人が戦っている姿を見物する。成る程…あの影のバケモノがドツクゾーンって言うならばアレがプリキュアって奴か？

しかし…プリキュアってもつとビームとか魔法染みたもので戦うのかと思つていたが、少し意外だ。

なんせ肉体のみで戦つてゐるのだから。

黒い女の子はバケモノをタコ殴りにしてるし、白い女の子に限つてはドロツプキツクや連續蹴りをかましている。

まるでハイレベルな女子プロレスをしている気分だ、先程から見て

いたが怒濤の勢いで戦っている。

「…あれがプリキュア…」

女性にも関わらず荒々しく、そして華麗だ。

プリキュア…ますます興味が湧いて来た。

だが彼女達の力や実力は高い事は解ったが、どれ程の物なのか未知数だ。

プリキュアだけではない、あのバケモノ…ドツクゾーンについてもまだ解らない事がある。

「試してみるか…」

『エボルドライバー!』

エボルドライバーを腰に装着し、コブラエボルボトルとライダーエボルボトルを両手に取り出す。因みにいきなり phase 4となるとプリキュアもろとも殺してしまいそうなので、エボルトリガーは付けていない。

本音を言うともう限界であつた、正直この力を試したかったのだ。そしてこの力を試すついでにプリキュアやあのバケモノと戦い、正確に実力を確かめる。相手がどれ程の物か知るには戦うのが一番と言ふしな。

『コブラ！ライダーシステム！エボリューション!!』

二本のボトルをドライバーに装置すると暗く、不気味な待機音声が流れる。しかしその音声は自分がエボルの力を使うという事を実感させ、更に気分を高揚させるのだった。

遂に…遂にこの力を使う事ができる…！

ドライバーのハンドルを回せば先程とは対象的に明るく、しかし何処か不気味な音声が流れる。

ベートーベンの交響曲第9番の一つ「歓喜の歌」をアレンジしたような音声。

それはこの世界に舞い降り、自分が好きだった仮面ライダーエボルになれる「歓喜」をまるで音にして歌っているかの様だつた。

『A r e y o u r e a d y?』

そしてハンドルを回す手を止めると、「準備はできたか?」と言わんばかりにドライバーの音声が尋ねてくる。

返答は言うまでもない。

「…変身!!」

『コブラ…コブラ! エボルコブラ!! フハハハハ!!』

エボルドライバーから伸びたパイプによつて3つの金色の管状のファクトリーEVライドビルダーが俺の周りに構成された後、エボルボトル内の物質がそのパイプ内を移動し、俺の前後にハーフボディとして生成され、俺を挟める形で結合し、赤と金で装飾された毒蛇コブラを思わせる戦士へと姿を変える。

「エボル、phase1」

仮面ライダーエボル コブラフォームに変身した俺は、毒蛇の様にゆっくりと、だが正確にプリキュアとバケモノに近づくのであつた。

「さて…戦うとしますか…」

## 4話 あそんでエボルト

N O S I D E

総一が変身し、ゆつくりとその場に近付いている頃。

プリキュアはザケンナーとの戦いに神経を集中させていた。

「はあつ！」

「やああああつ！」

結論か言うと戦況はプリキュアが優勢だつた。

力強く、かつ素早いキュアブラックの剛拳がザケンナーを打ちのめし、隙を埋めるかの様にキュアホワイトの華麗な足技がザケンナーに襲い掛かる。

以心伝心と言つても過言では無い、見事な連携プレーにザケンナーは翻弄されるばかりだつた。

「ホワイト！ マーブルスクリューよ！」

「ええ！」

プリキュアの技の中でも最大火力の必殺技「プリキュアマーブルスクリューア」を放つために二人は手を繋ぎ、片手をザケンナーに翳す。しかしその時だつた。

「きやつ！」

「つ！…何?!」

突如ホワイトの隣から赤色のオーラを纏つた何かが凄まじい速度で通りすぎて行つたのだ。

余りにも速いスピードのためか発せられた突風に、二人は思わず目を閉じる。

だが一瞬怯んだが二人は光の園の伝説の戦士、風圧程度なら苦にならず、すぐに回復して先程の超スピードで通りすぎた者の正体を確認するために目を開ける。

二人の目に入つたのは赤と金の装飾が施された鎧を身に纏う戦士の背中だつた。

「誰なのあの人？」

「さあ…でもザケンナーを倒そうとしてくれているみたい。」

戦士はザケンナーの懷に入り込むと、腰に着いている装置のハンドルを回す。

すると腰の装置から明るい雰囲気だが、どこか不気味な感覚を覚える音楽が鳴り響く。

「ベートーベンの交響曲第9番？」

「なにそれ？」

普通の女子中学生に比べて博識なホワイトはドライバーの音楽のモデルに気付いたが、ブラックは何の事が分からず目を丸くしている。

『R a d y g o ! エボルテックフイニッショ！ チヤオ！』

突如音楽が鳴りやめば、戦士は右拳に朱色の炎のようなオーラを纏い、ザケンナーに拳の一撃をかました。  
「ザケンナアアアアア！」

戦士が放つた拳はザケンナーの体に当たつた瞬間に空間を圧縮・爆発させ、ザケンナーは断末魔のごとき叫び声を上げ、複数の星形の生命体へと姿を変える。

その光景の意味をプリキュアは知つていた。

「一撃でザケンナーを倒した?!」

「ありえない…！」

驚愕する二人をよそに戦士：エボルはゆっくりと後ろを振り向く、その時初めて二人はエボルの顔を見る事が出来た。

「……！」

「……蛇……？」

エボルの顔は：一言で言えば不気味だつた。

上を向き牙を剥ぐコブラを彷彿とさせる顔つき、そしてコブラの舌

のような複眼。

決して醜い訳ではない。だがエボルからはどのような敵でも震え上がらせるであろう威圧感を感じた。

「…………」

エボルは二人をじっと見つめたまま動かない。二人もその場から一言も話さずに佇んでいる。

エボルから発せられる独特な威圧感に気圧されながらプリキュアとエボルは向き合ったまま見つめ合う、それから数分が足ったのか数秒の間だつたのか解らない。

ずっとこちらを見ているエボルに痺れを切らしたのかホワイトが話し掛ける。

「…………貴方は何者なの？」

警戒するような口調、確かにザケンナーを倒したが、それはただ相手にとつては都合の問題と言う可能性がある。完全に味方とは信じられなかつたのだ。

『俺か？俺はエボル、仮面ライダーエボルだ。』

そこで初めてエボルの声を聞く、しかし低音かつ渋く、威圧感のある金尾ボイスはホワイトの警戒心を解くどころか逆に増幅させる。

「…エボル？」

聞き覚えの無い名前にブラックは首を傾げる。

警戒しているホワイトに対してもブラックからはそういうものを感じなかつた。ザケンナーを倒した事からエボルを味方と思つていいのだろう。

『お前たちがプリキュアつて奴か？』

「ええ、そうよ。」

『そうか…なら少し遊ぼうか。』

エボルはそう言うと再び赤色のオーラを身に纏い、高速でホワイトの懷に入り込み、腹部に拳の一撃を当てる。

「あああっ！」

「ホワイト！」

エボルの一撃を食らつたホワイトは数メートル吹き飛ばされる、飛

ばされた先でぐつたりとダウンしているが気を失ってはいないようだ、しかし体が大きなダメージを受けたためか思うように動かない。

「よくもホワイトを…！」

ブラックは相棒を倒された怒りを拳に込めて渾身の一撃を放つが、それはいとも容易くエボルの掌に受け止められる。

『…準備運動には丁度良い…』

ブラックは受け止められた手を振り払い怒涛のラッシュを放つが全てエボルの高速移動で回避されてしまう。

「攻撃が当たらない…！」

『フフフ…どうした？ もう終わりか？』

「いいえ！ まだよ！」

エボルの挑発的な態度に苛つきながらブラックは先程以上の激しいラッシュをエボル目掛けて放つが、やはり同じように全て避けられてしまう。

「やああああっ！」

しかし直後、ダウンしていたホワイトが復活し、背後からエボル目掛けてドロップキックをかます。

『…！』

それに流石のエボルも冷や汗を搔いたのか一瞬驚いた素振りを見せ、紙一重で上体をひねり回避する。

『…調子に乗るな！』

エボルは強い口調でそう言うと高速で一人の懷に入り込み、腹部に至近距離でエネルギー弾を放つ。その威力は強力でプリキュア二人を後方に数メートル吹き飛ばす程だった。

「ぐつ！」

「きやあ！」

吹き飛ばされ、意識が朦朧とする中プリキュアは確信した。

「こいつはドックゾーンなんかと比べ物にならない程の強い」と。

だが一人は伝説の戦士、敵がどれ程強力であろうと人々を守るために

に戦わなくてはならない。

震える体をどうにか動かし、ゆっくりと立ち上がる。

足腰がフラフラするがそれでも膝を付かず、ぐつと堪える。

「ホワイト・マーブルスクリューよ！」

「…うん！」

二人は最後の希望に賭けるかの様に片手を天に翳す。

「ホワイトサンダー！」

「ブラックサンダー！」

すると黒と白の二つの雷がその場に落ち、二人の掌に吸収される。

「プリキュアの!! 美しき魂が！」

「邪悪な魂を！ 打ち碎く！」

「「プリキュア・マーブルスクリュー!!」

直後二人の掌から黒と白が螺旋状に交差したエネルギーが放出され、エボルに襲い掛かった。

プリキュア最大にして最強の必殺技、プリキュア・マーブルスクリューアはエボルの元に達すると同時に凄まじい閃光をまき散らす。それによりプリキュア二人は怯むが、数秒すれば光が鎮まり、その頃には直ぐにエボルの様子を確認していた。

「… いない…」

「…そんな…あり得ない！」

しかし二人は目の前の光景に驚愕した、なんと先程まで戦っていた筈のエボルが居なかつたのだから。マーブルスクリューをもろに受けた場合敵は吹き飛ばされたりその場で倒れたりとやられ方はそれ違う、だが今まで消える事は無かつた。

近くに自分達以外の気配は見当たらぬ。そこでエボルが消えた理由を二人の中は確信した。

「…逃げられたの？」

「…そうみたい。」

変身を解き、一息つく今までドツクゾーンの敵と戦つてきたが、あれ程強大な敵は初めてだつた。しかも何が目的かも不明。名前だけしか知らず何者かも解らない敵と来たものだから。精神的にも肉体的にも疲れていた。

「あいつ強かつたね‥」

「うん、確かエボルつて言つてた‥」

「うん‥また何時戦うか解らないし、今日はもう遅いから帰るわね、じゃあね雪城さん。」

「うん‥さようなら美墨さん。」

二人とも背を向け、家に帰るために歩き出す。

しかしここで二人とも背を向けなければこれから起ころる事は少し変わっていたのかも知れない。

そのせいで美墨なぎさは気付かなかつたのだから。  
雪城ほのかの体に赤色の粒子が入つていくのを。

## 5話 おとまりエボルト

ほのか side

公園でのエボルトと戦つてから数十分後、私は疲れた体を引きずりながら家に帰つていた。

「…はあ…」

「やつと着いた」と内心呟きながら家の門を通る、すると早速我が家の家族の一人が出迎えてくれた。

「…ただいま忠太郎。」

この子は忠太郎、私が小さい頃からこの家で飼つている私の大切な愛犬だ。

だが忠太郎は呼び掛けてもそっぽを向いて反応しない。様子がおかしいと思い近づけば帰つて逃げられる始末だ。

ご機嫌斜めなのかな?と考えその場を後にする、こういった事は機嫌が直るまで深入りしないのが最適だ。のんびりと忠太郎の機嫌が直るのを待とう。

「おや、お帰りほのか。」

「うん、ただいまおばあちゃんやま」

忠太郎を後にし、玄関の前に行くと祖母が帰りを迎えてくれる。どうやら掃除中なのか箒をさつこと掃きながら笑顔を浮かべている。

「今日は遅かつたねえ?」

「う、うん:部活が長引いちゃつて…」

咄嗟に帰りが遅い理由を誤魔化す。

祖母にプリキュアの事は秘密だ、下手に誰かに話そう物ならその人に危険が及ぶだろうし、それが家族ならば尚更だ。

「遅くまで疲れたでしょ? お風呂沸いとるからゆつくり使つて行きなさい。」

「うん。ありがとおばあちゃん。」

お風呂が沸いてるのは有難い、早速今日の疲れを洗い流そう。

「ほのか」

だが家に入ろうと玄関を開けたとたん後ろから祖母に呼び止めら

れる。

「あんた体調とか大丈夫かい？」

「…え？」

祖母の質問に思わず驚いてしまう。

確かに疲れてはいる、けど別に体に異常は無いはず。

「大丈夫だけど…どうして？」

「んや…なら良いのさ。」

そう言うと祖母はなにも言わず掃き掃除に戻る。私も早く疲れを癒すため家に入るのだつた。

\*\*\*

「……」

お風呂に入り、晩御飯を食べて疲れも少し取れた私は今、学校の課題に手を着けている。

自分はこう言つた事は疲れていてもやつておかないと気が済まない気質なのか、と考えると少し生真面目過ぎかと思い頬が緩む。

そういえば美墨さんは今何をしているかな？やつぱり疲れてそのまま寝ちゃつてるのかな？明日の学校で写させてつて泣きつかれそうだな…

「…ふふつ」

思わず笑い声が漏れてしまう。私と美墨さんは対照的なタイプだな…

「ほのか。」

そんな事を考えているとカードコミュニーンから相棒のミツブルが声を描けて来る。

「ん？どうしたの？ミツブル？」

この時間はミツブルは普通寝ているはず、お腹でも空いているのかな？

「…夕方戦った奴の気配がするミ。ボ」

「…！」

だがミツブルの言葉で私ののんびりとした考えは消え失せた。夕方戦った奴…エボルト…！

「…どこにいるかわかる?」

「…ほのかの家ミポ…」

私の家にエボルが…? そうなるとまずい、あいつの目的は何なのか解らない。でも私達にいきなり攻撃を仕掛け、私達では歯が立たない程の強さを持つている。

「おばあちゃんと忠太郎が危ない! 美墨さんを呼ばないと!」

「その…違うミポ」

少し戸惑った様に言葉を濁すミップル。

プリキュアになつて数ヶ月、ずっとミップルとは一緒に居た仲だが、こんな彼女を見るのは初めてだ。

「…違うつて…どう言うこと?」

家族に危険が及ぶかも知れない状況で何なのだろう?

私はイラつきを隠しながらミップルに問いかける。

だがミップルから帰ってきた返答は衝撃的なものだつた。

「ほのかから…エボルの気配がするミポ」

…え?

ミップルは何を言つているのだろう?

余りにも衝撃的な返答に頭が真っ白になる。

ほのかから? 私から? エボル? 夕方戦つた奴?

『こりや驚いた、俺の気配を察知できる人間がいるなんてな…』

…!

混乱する私に誰かが話しかける。

いや、この声を聞いた時点で誰なのかは解っていた。

「…エボル…」

『そうだ、俺の名はエボルト、エボルは渾名見たいなモンだ…最近地球へやつて来た地球外生命体さ。』

「地球外生命体…」

正直混乱している、いきなり現れて戦つた後も何故か自分の近くに居るのだから。

「…何処に居るの…?! そもそも何が目的?!」

『何処って…お前の体内だよ。目的は特に無い、もう果たしているか

らな。』

体内…？私の体の中にエボルが居るって事…？！

『まあ、いきなりそういう言われても困惑するだけだよな…この際話しておこう、俺昨日地球に降り立つたばかりで住むところが無いんだよ…』

「宇宙船とかは無いの？」

『無い』

「そ、そう…」

つまりエボルが言いたいのは地球に降り立つても行く所が無いから暫くの間私の体を貸してほしいという事だろう。

『頼む…虫が良い話だつてのは理解している、こつちも死活問題なんだ…地球にいる間で良いからお前の体に居候させて貰えないか…？』  
エボルの口調から察するに結構大きな問題の様だ。

「…いくつか聞いても良い？」

『答えられる範囲ならな。』

「なんである時私達に襲いかかつたの？」

『それは俺が君達のファンだからだよ、宇宙から見ていたんだ…プリキュアつてのが地球に居て、悪い奴らと戦つているってな。それで何れくらいの強さなのか気になつてな…誤解させたのならすまなかつた…』

何となくだがエボルが私の中で頭を下げている様な気がする。嘘を付いていたり騙したりしている雰囲気は無かつた。本氣で反省している様だ。

私達のファン…しかも宇宙から私達の戦いを見ていたんだ…でもあんなにボロボロにやられちゃつたんだし…がつかりさせちゃつたかな…？

『その…どうだつた？私達の強さは…？』

『…地球の中では相当強いと思うぞ。特に今日の君のドロツプキックには冷や汗をかいた…』

内心エボルの言葉に安堵する、でもそのドロップキックすら簡単に避けられてしまつた…

「あと一つ程聞きたいのだけれど…目的は何なの？もう果たしてい  
るつて言つたけど、そして何で地球に降り立つたの？」

『あー、その事なんだが…』

これは一番の謎だ、宇宙からのファンが居てくれたのは嬉しい限り  
だが、わざわざ私達に会いに来るために地球へ訪れたとは考えにく  
い。

となると…

エボルから帰つてきた返答は予想通りのものだつた。

『俺の故郷の星は滅んでいる…だから俺はこの地球を第二の故郷にし  
ようと思つて いるんだ。』

「やつぱり…」

少し考え込んでしまう、もし私がエボルと同じ立場で、地球が滅ん  
で私だけ生き残つたらと考えると…ゾッとする。

『勿論ずっととは言わない、暫くの間で良い。お前の体に居候させて  
貰えないだろうか？』

私の体に居候…端から聞いてみれば凄まじいパワーワードだろう。  
でも故郷が無くて帰る場所が無いのは可哀想かも…

「…ほのか…」

ミツプルが不安そうに覗いてくる。少し難しい顔をしていたから  
だろうか。

「良いでしよう。」

「ほのか…?!」

『本当か?!』

エボルにちゃんと聞こえるように自分の体に目を配りながら話す。

「うん、帰る場が無いのは可哀想だし。ちゃんと地球の決まり事を  
守つて生活できるなら、私からなにも言う事は無いから。」

「…ほのかがそう言うなら私も賛成ミポ」

『二人とも…ありがとう！ いつかこの礼はさせて貰うよ…』

何処か嬉しそうで声が弾んでいるエボル。

そんなこんなでトラブルは有つたが私の体に同居人が出来たの  
だつた。

余談だが。

「ねえ…エボル。 そういえば私の体内に居るって言うけど今貴方私の  
何処に居るの？」

『…え？ 子宮だけど』

「いやああおあああ!!」

エボルのセクハラ染みた冗談で同居一日目にして追い出しそうに  
なつたのは別の話。

## 6話　がつこうエボルト

ほのか side

目覚まし時計が鳴り、私は目を覚ます。朝の6時：私がいつも起きる時間だ。

「おはようミポ！ほのか！」

ベッドから起き上がるとミップルが朝の挨拶をしてくれる、こうして元気に話すミップルをみると、可愛いと感じ思わず頬が緩んでしまう。

「ええ、おはようミップル」

私は可愛らしい相棒に挨拶を返すと、昨日より新しく住む事になった居候にも声を掛けるべく、首を下に向け自分の体へと目を写す。

「おはよう、エボル。」

声を掛けてみるが返事はない、まだ寝ているのかな？

「エボル朝だよ！起きて！」

そういえばエボルは私の何処に潜んでいるのだろう、昨日の夜聞いてみたら何か気持ち悪い冗談で誤魔化されたが…まさかアレ本当じやないわよね：

『ん…んー』

そんな事を考えながら、自分の体へと目を向けながら寝坊助のエボルを呼び掛けていると、身体の内側から氣怠そうな声が聞こえる。どうやら起きた様だ。

「おはよう、エボル。」

『ん？ああ…おはよう、ほのか…今何時だい？』

「朝の6時だよ。」

『…もう少し寝かせてくれ…』

「ダメよ！エボル？ちょっとエボル！」

返事が無い…どうやら二度寝に入つたようだ…地球外生命体ってこんなにグータラなの？

全く：仕方ない、別に寝てても特に問題無いし、ミップル

も学校では寝て貰つてるし問題は無いだろうから、このままエボルは放つて置こう。

私は着替えを済ませた後、朝食を食べ学校へ行くために部屋を出るのであった。

＊＊＊

学校に着き、いつもも同じくミップルを寝かせると、授業を受けるために教室へ向かう、すると廊下で見覚えのある人物が走つてくるのがわかる、幼馴染みの藤森君だ。

「おはよう、藤森君そんなに急いでどうしたの？」

「ああ、おはようほのか……一時間目移動教室だつたんだよ。だから急がないと……！」

「うん、じゃあね！」

そんなやり取りを交わした後藤森君は慌てた様子で走り去つていった、大方彼の事だ、授業ギリギリまでサッカーの練習をしていて移動教室だつた事を忘れていたのだろう。

『お前の男か？』

「ひやつ！」

急に聞こえたエボルの声にびっくりして思わず変な声をだしてしまう。

「起きていたの？ エボル？」

『ああ、おはようほのか。で？ 今の男とお前はどういう関係なんだ？』

『関係つて……ただの幼馴染みよ？』

『幼馴染み：彼氏とかではなくて？』

藤森君が私の彼氏？ そんな事考えた事も無いんだけど。

「ないない、ただの幼馴染みよ。』

『そうか…』

そんなやり取りをしていると、何故か周りの視線がこちらに刺さる、まるで変人を見るような目だ。

「もしかして……エボルの声つて周りに…」

『うん、聞こえていない。基本的にお前にしか聞こえないが、どうやら例外としてミップルは聞こえるらしいな。』

「…じゃあ今まで私は…」

『うん、周りから見ればお前は、大声で独り言を言う変人だろうな。』  
「…………つつつ！」

自分一人で白昼堂々と独り言を大声で言っていた事を思いだし、エボルの変人宣言で顔から火が出る程真っ赤に鳴っていくのが解る。  
「~~~~~!!」

だめだ恥ずかしすぎる、私は声にならない声を出しながら大急ぎで教室へと向かうのだつた。

\* \* \*

その後、教室にて。

なんとか周りの冷たい目線を潜り抜け、落ち着きを取り戻した後自分が席に座る。HRを終わり、教科書やノートを机に起いて授業の準備が完了すると、同時に扉が開き先生が教室に入つてくる。

一時間目は国語の授業だ、私達の国語担当の先生は文章の読解力に力を入れていて、そのため良く生徒を指名して教科書を音読させる事で知られている。

『お？枕草子か？』

授業が始まり、教科書を開くとエボルが興味深そうに尋ねて来る。

「うん…知ってるの？」

『ああー！そりゃあ平安時代で有名な文豪だからな！』

周りに聞こえないように呟く私と逆に、エボルは逆にテンション高めに熱弁してくる。

しかし意外だ、エボルがまさかこう言つた文学が好きとは思わなかつた。あれ？でもエボルが地球に来たのってつい昨日つて言つていたし…私もエボルに本を読ませた事も無い。

「…でもエボル…枕草子なんか何処で知つたの？」

『あ？ああ…ちょっと色々あつてな…』

それ以降エボルが私に話し掛ける事は無くなり、すっかり大人しくなつてしまつた。

なんかはぐらかされた気がする…

まさか宇宙でも枕草子が知られているとか？うん…私達のファ

ンつてエボルも言っていたからその可能性はある…でも宇宙に地球の文学まで有つたら宇宙人の言語は地球の言語？宇宙語とかは無いの？そういえばエボルも最初から日本語を話していた。私達を見る時に日本語を勉強したのかな？

…さすがに考えすぎかな？

\*\*\*

その後授業が終わり、次の授業まで間のトイレ休憩。

「あの…雪城さん？」

「ふえ？」

用を済ませ、手を洗っていた所美墨さんに呼び止められる。

「その…えーっと…」

美墨さんは言葉を濁すばかりで何処か気まずそうでいた、私何か悪いことしちゃったかな？

そういえば授業も上の空で先生に注意されてたつけ…もしかして昨日のエボルの事考えていたのかな？…ちゃんともう戦う事は無いって話さないとな…

「そうだ美墨さん昨日「ミツップルミツップルミツップル！」

「その声はメッブルミッポ!!」

私が話そうとした瞬間に美墨さんのカードコミュニケーションからメッブルが現れ、それに呼応するかのように私のカードコミュニケーションからもミツップルが現れる。

二人はコミュニケーションの状態から本来の姿に戻り何時も通りイチャ付き始める。全く…本当にラブラブなんだから…

しかし良い所で話の腰を折られてしまった、エボルの事は後で話そ  
う。

「ちよつと！誰かに見られたらどうするの?!」

そんな事を考えていると、美墨さんがイチャついているメッブルを引き剥がしている、しかしメッブルはひょいと簡単に美墨さんから抜け出して得意そうな顔で

「なぎさもいざれ恋をする者の気持ちが解るはずメポ！」  
と言う。

恋をする気持ち?!どう言う事かしら…

「メッップルどう言う事ミポ?」

ミッップルが私の気持ちを代弁様に聞いてくれる、するとメッップルはミッップルにこしょこしょと耳打ちをする。私にも聞かせて欲しいんだけど…

「な、何やつとんじやああああい」

すると美墨さんは何か思い当たる節が有るのか怒鳴り声を上げメッップルを再び抱え上げてミッップルから遠ざけてしまった。

これじゃあさつきの言葉の意味を知る事は難しそう…別の話題を振りましょう。

「そ、う、い、え、ば、美墨さん…私に何か話があつたんじや…」

「え？ああ…なんでもない！なんでもないよ！」

しかし話題を振った瞬間、美墨さんは逃げるようトイレから出ていつてしまつた。なんか…まるで私と一緒に居たく無いみたいに…『おいほのか！小便だつたら言つてくれよ。子宮から膀胱に移動して吸収するのに…』

…この変態宇宙人は後で殺しておこう。

\* \* \*

その後ミッップルを再び眠らせた後、二時間目の授業の数学、エボルは一切私に話し掛ける事は無かつた、昼寝でもしていたのかな？

そして三時間目の理科、理科室でのガスバーナーを使つた熱分解の実験、エボルもこれに興味津々で私の実験を見ていた、エボルもある程度化学の知識があるらしく理科室の実験道具を見たり、骨の模型を「せんと」、カエルのホルマリン漬けを「ばんじょー」と名付けて遊んでいた。

四時間目の社会の授業、エボルは歴史が好きらしく教科書を読んではその深い知識を見せていた。その時の声は楽しそうで、何処でその知識を手に入れたのか聞くと宇宙では地球の歴史も習う事を教えてくれた。

そして授業の間の昼休み。

『なあ…お前何時も一人で食つてゐるのか?』

私が化学室で一人でお弁当を食べる中、エボルはそれを疑問に思つたらしく、聞いてくる。

「ええ…仲の良い化学部の人も他の人と食べちやつているし…  
『なるほど…俗に言うぼつちつて奴か…』

…素直に否定できないのが悲しい。でも今は美墨さんが居るし別に寂しくはない。

『…なあ…その唐揚げ上手そうだな…一口くれよ』

「え? 良いけど…食べれるの?』

『うん、ちよつと待つて…今人間の姿になるから…』

人間の姿…? 私が頭にハテナマークを浮かべてゐると、私の下腹部から赤色のアメーバ状の粒子が飛び出す、その粒子は形を変え、徐々に人形となり最終的には私よりも年上の20歳程の男性の姿になつた。

「あなた…人間の姿にもなれたの?』

「うん、やつぱりこっちの方が動きやすいわ』

エボルらしき男性は軽くその場でストレッチを始める、なんか色々あり得なさすぎて脳ミソがショートしそう…

「で? 唐揚げ食わせてくれるんだろう?』

「え? エエ…はい。』

箸で唐揚げを取り上げエボルに差し出すと、嬉しそうな顔をしながらパクつと食い付き一言「うまい!」と言うと再び粒子に戻り私の下腹部へと戻つていった。

…トイレの時から思つていたけど、何ちゃつかり私の子宮に居るのよ…

そういえば最初に有つた時も子宮に居るなんて言つていたけどあれ冗談じやなかつたのね…

「はあ…』

こんな変態趣味の宇宙人、追い出せるものなら追い出したい、しかし故郷が滅び行く所が無い以上放つては置けない…

…一度はつきり言わなきやダメなのかな…?』

再びため息をつくと、自然と右手に未だ握っている箸を見る。

そういえばエボルつたら箸を差し出したとたんに食い付いたわね

…まるでエサを差し出された鳥みたい…

それに…自意識過剰かもだけど、唐揚げを欲しがったのも私が友達居ないって知ったから…

「ふふふつ」

全く変態じやなきやこう言つた可愛くて優しい一面もあるのに…：  
…ん？ 箸を差し出した？

エボルに差し出したのは私の箸…

エボルが私に唐揚げをせがんだのは私の食事中…  
つまりエボルに差し出した箸は私が口をつけた…

「…………つゝゝゝゝ！」

『どうした？ほのか？俺との間接キスそんなに恥ずかしかったか？』

「う…うるさいッ！」

…！やつぱりこの宇宙人絶対に追い出してやる！